

燕村先生真筆

俳諧三十六歌仙

俳諧三十六歌仙は俳聖燕村が古來の俳仙三十六人を撰んで其風采を描き俳仙が一代の名吟を以て之に發したる色劇美本也

子規先生自筆

俳人芭蕉

子規の手形及題詠類用簡筆紙河東碧梧桐氏書簡木版刷付古風紙入製本

東京見物

田舎渡野郎十問接面を活して東京を見物し遊學を東京朝日新聞に掲げて文名忽ち文壇を壓す朴納漢が東京親抑もや如何

伊藤銀月君著

草鞋日記

其と俗人と我と昔活きて躍り今代を經てし前代を緯となして織りなす錦天下稀有の珍香とは正真正正銘懸直なき所也

木下尚江君著

靈か肉か

小説火の柱二頁人の自白に其革命的的思想と熱烈の如き筆とを示したる著者が新生活に入る第一段階の小説は即ち之れ

木下尚江君著

火の柱

革命の戰士社會主義の鼓吹者たる著者が新に採りたる小説の筆の如何に新生活面を出せしか著者自身の告白を見よ

木下尚江君著

良人の自白

著者が主義信仰の具體的説明たる本書は苦悶せる青年をして新曙光を仰ぐの希望に入らしむるもの也

中村春雨君著

密航婦

人の心も運船の冷たき寒き世の中に乙女心の戀の花咲き出でん春にはあはれて遂に枯れ行く身なるべきか嗚呼密航婦!

中村春雨君著

無花果

無花果は在來の陳腐なる若葉を脱し材を宗教に採り信と人情の衝突家庭と社會との撞着とより生ずる悲劇を温容なる女主人の樂化せしむるを描きし者

大倉桃郎君著

舊山河

老ひたる父と病める妹と可憐の戀人とを殘して國家の召に應じた一士卒が再び故山に歸ればあはれ舊山河依然としてあれど我家の軒は傾き戀人は黄金の爲めに離れ老父は正に愛見が捧ぐる一滴の水を待てり嗚呼如何になり行くべきか!

大倉桃郎君著

琵琶歌

小説琵琶歌は大阪朝日新聞懸賞當選の作なり綿々として怨は長へに盡きぬ琵琶激越の調全篇の骨子となりて哀怨凄愴の極想正に人を魅し去らんとす

大倉桃郎君著

不知火

小説「不知火」は往年「琵琶歌」を著して京阪と東都の文壇及び劇場に幾萬の子女を狂せしめたる黒風白雨樓主人大倉桃郎氏の新作

石川半山君著

世界的大競走

理學士秋月期依骨ある從者を隨へて歐洲線を取り蘇澤伯露新夫人と共に米國線を取り共に英京倫敦に向つて世界的大競走を試む其結着や如何

須藤南翠君著

間一髮

南翠先生は文壇の元老也暫らく大阪にありしが再び中央文壇に現る元老の復活何を意味するものぞ希くば其讀らざる本書に問へ

菊池幽芳君著

妙な男

妙な男は一篇の戯曲的構想より成り多少の喜劇趣味を帯べる奇譚なる小説也單調なる文壇に異彩を放つ宜なる哉

佐野天聲君作

不死の誓

脂粉の氣衰壯の致併せ兼りて宛然一大横披の大パノラマの如し

小笠原白也君著

小嫁が淵

大阪毎日社が特設富選の作中最も傑出せるもの嫁が淵一篇となす其構想の如何に幽玄にして運筆の如何に豊麗なるか讀了して初めて知るべきなり

柳川春葉君著

小縁の糸

縁るに難きふし糸の思ふに切れて思はぬにつづく縁の糸たぐるに任かす亂れ糸亂れくして縁ぶるに由なき女の一生春葉子描き盡して餘す所なし

徳田秋聲君著

小奈落

「奈落」は徳田秋聲先生が近時最も意を注がれたる傑作也「奈落」のうちに自づから讀者をして熱き涙を催ふさするものあるべし

小山内八千代子著

小新緑

冷艶雨に憫む春花の態と、夜露を怨む秋花の姿と、吐露日に向ふ夏花の詩と、空を風に乗る、枯花の情と皆此一篇にありて新なり

水谷不倒君著

小岩窟穿

社會の腐敗極度に達せるの現時代に當り此の小説を公にす欲する所は風教を矯正せんとするに外ならず

菊池幽芳君著

小七日間

露西亞皇室の内外に起れる尤も慘憺たる小説にして讀者の心腹を寒からしむるものあり

中村春雨君著

小雛鳩

年若くして文壇の龍見たりし著者が佛を此集に見よ

巖谷小波先生著

小喜劇七草

明治文壇の鉄匠を譽ぐれば、滑稽文學の幼稚なる事、正に其一に數ふべし、本書は即ち之が補足の一端として生れたるもの也

トルストイ先生原作 内田魯庵君譯

イワンの馬鹿

最近トホホ背保入 定價金貳拾 郵税二 錢錢入 彼は「イワン」と共に世界の偉人である偉人偉人を語る、其の内容や仰も如何

中澤弘光君著

富士十二景

風景水彩畫紙付 定價金壹圓貳拾 郵税十二 錢錢付 田子の浦より見たる富士、富士川より見たる富士、(朝)、精進湖畔より見たる富士(夕)、三保の松原より見たる富士、豆州長浜より見たる富士、三坂峠より見たる富士

小林萬吾君著

風景水彩畫帖

拾遺六葉 紙附 定價金五圓 郵税四 錢錢附 神韻悠揚、典雅幽麗、木版精巧、印刷高尚、是れ本畫帖を現はせる旨也

薄田泣菫君著

白玉姫

布装 定價金八圓 郵税八 錢錢裝 詩は調を民謡に採りて今の所謂美文一致の新體を詩歌の域に試みしもの故文は日記あり隨筆あり推致錢かに眞個無類の詩也

薄田泣菫君著

白羊宮

洋裝 定價金壹圓 郵税十 錢錢本 氏が味ひたる女人の愛情は如何、藤原と山崎が詩人の耳に何と叫びしか白羊宮は之を歌ふに纏繞たる夢幻の國を以てせり

横瀬夜雨君著

二十八宿

四六判 定價金五圓 郵税六 錢錢裝 今の詩壇に酔乎眞情流露の詩を有し又その作品以外に同情と優美を集めしむるものを横瀬夜雨氏とす本書は氏が血と涙とに染められたる哀歌也

オーキンミラー、野口米次郎兩君合著

劍と戀の日本

四六判 定價金四圓 郵税四 錢錢裝 英詩人オネ、ノグチ氏が米國の詩仙オーキンミラー氏と共に編せしもの本書也

與謝野晶子著

乱れ髪

洋裝 定價金三圓 郵税四 錢錢本 激烈なる情熱滿紙、有聲の男子をして愕然其の首よ所を失はしむ

與謝野晶子著

小

扇

本書に於て奔放抑ふへからざる著者の情熱は更に一段の高深雄渾を加ふ

洋装 定價金三十五 郵税四 錢錢本

暮笛集

與謝野鐵幹 與謝野晶子兩君合著

洋装 定價金六十六 郵税六 錢錢本

毒草

詩壇に於ける作者夫妻の高名は今更に際々を要せし

新式 定價金五十六 郵税六 錢錢裝

塔影

塔影は常に温顔を以て讀者の胸に接す

定價金四十五 郵税六 錢錢裝

泡鳴詩集

久遠無窮の想其婉曲妙の調凡て調劑の靈感より來る於戲

定價金五十六 郵税六 錢錢裝

其の曲や如何

與謝野晶子著

夢の華

彼の「亂れ髪」の奇矯熱烈舞臺の體態典雅を昇びたるも

布装 定價金八拾 郵税八 錢錢裝

黒髮

こは萬朝報中學世界其他諸雜誌に寄稿せる青年士女諸氏の短歌中より、晶子女史の選抜を経たるものなり

新式 定價金五十六 郵税六 錢錢本

戀衣

新派歌壇の才媛として才藻共にその類を見ざる三女史が近作の短歌と長歌とを集めたるもの

新式 定價金四拾 郵税四 錢錢本

行く春

薄田泣菫君が第二の詩集を「行く春」と云ふ著者が熱血のこぼれ出て、詩を作したるもの實に五十有餘篇

全紙二度 定價金四拾 郵税四 錢錢本

高安月郊君著

寢覺草

高安月郊氏の近作數十篇を輯めたるもの史詩あり叙事詩あり皆錦繡の作

新式 定價金六十八 郵税八 錢錢本

頌榮

(都新聞野)著者の名は此の集によりて評者の耳に新なる

定價金四十五 郵税六 錢錢本

むらさき

今や國詩革新の潮流頗る急なるに當り江湖の才人乞ふ本

新式 定價金三十五 郵税四 錢錢本

病間録批評集

梁江堂編輯部編

定價金廿五 郵税四 錢錢

基督物語

中村春雨君著

定價金拾二 郵税二 錢錢

網島榮一郎 宇佐美英太郎兩君共著

見神論評

吉水智海君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

支那佛教史

小野藤太君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

眞言哲學

蜷川龍夫君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

起信哲學

小野玄妙君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

佛教年代考

舟橋水哉君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

俱舍哲學

舟橋水哉君著

定價金六拾 郵税八 錢錢

187
322

<p>三宅 啓君著</p> <p>都 市</p> <p>定價金拾二五 稅 錢</p>	<p>伊藤銀月君著</p> <p>男 女 觀</p> <p>定價金拾二五 稅 錢</p>	<p>現代名士解釋</p> <p>戀 愛 觀</p> <p>定價金拾四 稅 錢</p>	<p>水野 龍君著</p> <p>南米渡航案内</p> <p>定價金貳拾五 稅 錢</p>	<p>伊藤銀月君著</p> <p>現代青年論</p> <p>定價金拾六 稅 錢</p>	<p>竹田默雷師著</p> <p>禪 機</p> <p>定價金拾四 稅 錢</p>
<p>杉村楚人冠君著</p> <p>七 花 八 裂</p> <p>定價金六十六 稅 錢</p>	<p>大内青巒先生著</p> <p>佛教の根本思想</p> <p>定價金五十六 稅 錢</p>	<p>忽滑谷快天師著</p> <p>參 禪 道 話</p> <p>定價金四十六 稅 錢</p>	<p>久津見巖村君著</p> <p>家庭教育のしつけ</p> <p>定價金四十五 稅 錢</p>	<p>本書は著者が多年の實踐に依り幼稚時代、児童時代、青年時代の四段階に亘りて細説せられたる家庭教育の好参考書也</p> <p>佐野天聲君著</p> <p>小 露 の 曲</p> <p>定價金六十八 稅 錢</p>	<p>見渡す野邊に八千草の今を盛りと咲き揃ふ、此の秋の夜を悲しげに唄つる聲は蟋蟀が幾夜も絶たぬ露の曲、涙あふるの土よ一本を取りてあげられ其の一滴を涙き給へかし</p>

